

*D'un nouveau complot contre les  
industriels* の周辺

——パンフレットから小説へ——

柏 木 治

序

『産業家に対する新しい陰謀について』 *D'un nouveau complot contre les industriels* (以下『陰謀』と略記する)<sup>1)</sup> は、1825年の恐らく12月の初めに出版された24頁からなる政治的パンフレットである。一応政治パンフレットの形をとっているが——何故ならばこの小冊子の目的は、F・リュードの総括に従えば、サン・シモン自身、『生産者』 *Le Producteur*<sup>2)</sup> に集う彼の弟子たち、産業主義を奉ずる大産業家および銀行家、これら三者に攻撃を加えることにあったからである<sup>3)</sup> ——、ここに読みとれる作者スタンダールの執筆動機と、駁論を展開するのに用いられる論理を検討するなら、同時にまた、このパンフレット出版直後の同時代人の反響をも読み合わせるならば、この反サン・シモン主義的パンフレットの論旨は、諧

- 
- 1) *industriels* を「産業家」と訳す。理由は、ここでいう *industriels* はサン・シモンの理論によるものであり、この思想家によれば、*industrie* なる言葉はわれわれが今日使う「工業」よりもはるかに広い意味をもっているからである。Cf. *Catéchisme des industriels, premier cahier*, p. 3. (*Œuvres de Saint-Simon & d'Enfantin*, t. XXXVII. Aalen Otto Zeller, 1964. Réimpression de l'édition 1865-78.)
  - 2) 1825年5月19日にサン・シモンが死んだのをうけて、彼の弟子たちによってその学説を流布する目的で発行されるに至った機関紙。hebdomadaire とし同年10月1日より発行される。
  - 3) Fernand Rude, *Stendhal et la pensée sociale de son temps*, nouvelle éd. augmentée, Gérard Monfort, 1983, p. 137.

諷やイロニーには刮目に値するところがあるけれども、少なくとも当時の社会思想的趨勢を攻撃するものとしては、かなり奇妙な性格のものであることがわかる。

本稿では、こうした印象を与える原因のひとつとなっていると考えられる「考える階級」*la classe pensante* という甚だ曖昧な概念の意味を考え、同時にこのパンフレットに対して同時代人から寄せられた反響を辿ることを通して、このパンフレットが小説家誕生にとってどのような意義を果しているかを考察してみたい。

## I

『陰謀』の作者の拠って立つ階級として謳われているかにみえる「考える階級」は、次の記述からその大まかな位置づけを知ることができる。

Toutes les professions pratiquées avec probité sont utiles, et par conséquent estimables ; telle est la vieille vérité que proclame la classe pensante placée entre l'*aristocratie*, qui veut envahir toutes les places, et l'*industrialisme*, qui veut envahir toute l'estime.<sup>4)</sup>

作者自身がことさらに強調を施している「貴族階級」*aristocratie* と「産業主義」*industrialisme* の中間項として位置づけられたこの階級は、「産業主義と特権階級という相対立する二つの陣営の滑稽さ (le ridicule) を見出すのに恰好の位置にいる。」<sup>5)</sup> さらに「考える階級」は「世論の製造」を託された階級<sup>6)</sup> であって、「金持ちでも貴族 (noble) でもなく」<sup>7)</sup>

4) *D'un nouveau complot contre les industriels, Œuvres complètes, Cercle du Bibliophile, t. XLV, p. 275.* (以下、註においては *Nouveau complot* とのみ表記する。) 尚、特に断らない限り、イタリックはすべて原文のままである。

5) *Ibid.*, p. 272.

6) *Ibid.*, p. 272.

7) *Ibid.*, p. 272.

「6000リーヴルの年金を有する人々の階級」<sup>8)</sup>である。以下がその理由である。

Ces gens-là [= les gens à six mille livres de rente] seuls ont le loisir de se former une opinion qui soit à eux, et non pas celle de leur journal. Penser est le moins cher des plaisirs. L'opulence le trouve insipide et monte en voiture pour courir à l'Opéra; elle ne se donne pas le temps de penser. L'homme pauvre n'a pas ce temps; il faut qu'il travaille huit heures par jour, et que son esprit soit toujours tendu à bien s'acquitter de sa besogne.<sup>9)</sup>

以上を総括すると、「考える階級」は、第一に貴族階級と産業主義の中間項であり、第二に豪奢と貧しき者の中間項をなす階級である。この二組の対立項の交差するところに結ばれるこの階級の像は、しかしながら、これ以上明確にされることはない。「考える階級」とは、後の時代の《intellectuels》や《intelligentsia》を連想させる点で今日の読者の興味を惹くに足るものであるが、「階級」という政治・経済的な意味論的価値をもつ用語を冠している以上、本来ならば少なくとも何らかの意味で社会的に規定されて然るべきであろう。極めて社会的意味合いの濃い言葉が幸いにして読者の注目を惹くに値する効果をもち得たとしても、それが社会的な文脈の中で明確に定義されることがなければ、単なるレトリックに過ぎない。スタンダールのいう「考える階級」は、例えば後世の様々な「階級」概念がもっている社会的分裂・対立へと理論的に展開されるパースペクティブに欠けており——もちろん20頁余りの小冊子にそれを望むべくもないが——、従って全体のトーンは、作者自身「考える階級」をひとつのレトリックとしてしか考えていなかったのではないかとも思わせるのである。全部で6回現れるこの用語をすべて仮りに一人称代名

---

8) *Ibid.*, p. 272

9) *Ibid.*, pp. 272-273.

詞《je》に置き換えて支障のある箇所はひとつとしてなく、むしろその方が文意が明確になるようにさえみえるからである。実際、この言葉は全て主格として、しかも1例を除いて全て文頭に現れ、いやがうえにもレトリック効果を発揮するように配されている<sup>10)</sup>。さらにその後には置かれる述語動詞——《préférer》、《honorer》、《se contenter》等——を一瞥すれば、「考える階級」は、「階級」という語が本来そうであるような客観的検討を経た概念であるよりはむしろ、一人称代名詞の代替物として案出された表現（従ってむしろ文学的価値の方が勝っている）に近いという事実に頷けるだろう。この「考える階級」が主観的・個人的判断を下す主体としての印象を与えるのもこのためである。従って「階級」という用語をここでスタンダールが選んだことにあまり深いイデオロギー上の意味を読み込むのは誤りであるが、実はこのイデオロギー性の欠如こそが『陰謀』を政治的パンフレットの本来の価値から遠ざけ、作者自身の内での矛盾を露呈させることにもなるのである。

ところでG・ムイヨーはこのパンフレットを失敗作として規定し、その論証のために彼女はまず、パンフレットをジャンルとして成立させる4つの条件を挙げる<sup>11)</sup>。第一に、「明確に定められた標的(cible)を想定している」こと、そしてそれは一社会集団であること、第二に、「テキストに現れるパンフレットの émetteur がはっきりと規定されて」いること、第三に、作者と標的とのあいだに連帯や好意の情があってはならないこと、第四に、「テキストにおける否定的側面が、このテキストの支えとなり、批判の根拠となっているイデオロギーにあっては肯定的価値をもつ」こと——以上がその条件である。

いまここで彼女の所論に則して論を進めると、このパンフレットの最大

10) 例えば：《La classe pensante accorde...》、《La classe pensante, (...)》、《préfère...》、《La classe pensante honore...》等。

11) Geneviève Mouillaud, 《Le pamphlet impossible》 in *D'un nouveau complot contre les industriels*, Flammarion, 1972, pp. 70-71.

の標的は自由主義イデオロギーを旗印に交換価値の絶対的支配をもとめる産業主義であり、これを攻撃する当のパンフレットの émetteur たるスタンダールの拠って立つイデオロギーもまた、エルヴェシウス、トラシー、ベンサムの《utilité》を中枢に置く自由主義のそれであるという、甚だ奇妙な関係が成り立っていることがわかる<sup>12)</sup>。従って、上の第三、および第四の条件をこのパンフレットは満たしていないことになる。しかしここから即座にこれが失敗作であると断じてもそれほど意味はなく、むしろ、スタンダール自身、自由主義イデオロギーの立場からそのイデオロギーの根幹をなす交換価値の絶対的支配に批判の鋒先を向けることの矛盾を、そしてその困難さを十分知っていたと言うべきであって、われわれが目しななければならないのは、その困難さの中で、イデオロギー上の理論的が対立を見出し得ぬがゆえに、議論が政治・社会的なレヴェルから個人的な「好み」の問題へと横すべりしてゆく際に、あたかもそれを隠蔽する装置でもあるかのように、「考える階級」という言葉が使用される点であろう。

La classe pensante accorde sa considération à tout ce qui est utile au plus grand nombre. Elle récompense par une haute estime, et quelquefois par de la gloire, les Guillaume Tell, les Poirier, les Riego, les Cordus, les gens, en un mot, qui risquent beaucoup pour obtenir ce qu'à tort ou à raison ils croient utile au public.<sup>13)</sup>

ここに見られる「最大多数にとって有用な」もの、「一般大衆にとって有用な」ものとは自由主義イデオロギーの掲げる合言葉である。そしてウィリアム・テル以下、ここに列挙された英雄たちに「高い尊敬」と「栄光」をもって報いようとするのはスタンダールの個人的な「好み」である。「考える階級」という語は、イデオロギーのもつ社会性を、いかなる論理

12) このテキストにはイロニックな意味を帯びているものも含めて、《utile》が9回、《utilité》が3回出てくる。

13) *Nouveau complot*, p. 273.

的説明もなしに個人的な嗜好の問題に結び合わせるために、換言すれば、社会的なものを個人的レベルにまで横すべりさせるためにもち出されていると言うべきだろう。次の引用文にも同様の操作を読みとることが可能である。

La classe pensante, mesurant avec soin son estime sur l'*utilité*, préfère souvent un guerrier, un habile médecin, un savant avocat qui, sans espoir de salaire, défend l'innocence, au plus riche fabricant qui importe des machines et emploie six mille ouvriers. Pourquoi ? C'est que pour arriver à une haute estime, il faut, en général, qu'il y ait *sacrifice* de l'intérêt à quelque noble but.<sup>14)</sup>

「考える階級」の名において《utile》, 《utilité》をもっぱら個人的「好み」のレベルに引き寄せて論じられるのをみて、恐らく批判の標的となった当事者の方がある種の当惑を感じたとしても不思議ではない。次節では、このパンフレットが与えた反響をできる限り資料に忠実に辿ることによって、スタンダールの置かれた状況を考えてみたい。

## II

1825年11月30日に早速A・セルクレ<sup>15)</sup>とスタンダールのあいだでこのパンフレットについて書簡の遣り取りがある(11月30日の段階では恐らくまだ出版されていなかったであろうが、スタンダールの周囲はすでにその内

14) *Ibid.*, pp. 275-276.

15) A・セルクレとスタンダールは『陰謀』以前から、両者が足を踏み入っていたドレクリューズのサロンやその他の自由主義インテリの集う場所ですでに知り合いであった。セルクレは『生産者』の *directeur* となり、第二号には「文学に関する哲学的考察」という題の論文を寄せている。Cf. R. Baschet, *E. - J. Delécluze témoin de son temps (1781-1863)*, Boivin, 1942, p. 212.

容を知っていたらしい<sup>16)</sup>。まずセルクレは次のように反論の筆を起す。

Voici l'observation: vous parlez de ce que vous n'entendez pas. Je ne serai point assez injuste pour vous en faire un tort. Si vous ne comprenez pas certaines choses, la faute en est à votre intelligence et à votre éducation; et comme, apparemment, vous n'avez fait ni l'une ni l'autre, comme vous tenez la première de vos aïeux Stendhal et les bases des la seconde des pédagogues de votre enfance, vous n'êtes point comptable du résultat. Que si vous parlez de ce que vous n'entendez pas, ce n'est pas non plus un tort à vous particulier, c'est la faute du temps où nous vivons.<sup>17)</sup>

手紙の筆者は皮肉にもスタンダールの知性と彼が受けて来た教育に託けながら、『陰謀』の作者が何も理解していないこと、従ってこの問題についてとやかく議論する資格を何らもち合わせていないことを当の本人に諭しているのである。「私もまた、ミル、マクロック、マルサス、リカードを読んだ<sup>18)</sup>」という作者の言に対して、「あなたは経済学を読んでいるとのことですが、まことに残念なことに、それは時間の無駄というものです。」<sup>19)</sup>として次のように続けている。

Je veux seulement vous renvoyer aux divers ouvrages publiés par M. de Saint-Simon, et que vous avez lus puisque vous discutez avec lui. Entre nous, si vous n'y avez vu que ce que

16) Cf. V. Del Litto, 《Une lettre inédite de Stendhal à propos d'《Un nouveau complot contre les industriels》》, *Stendhal Club*, n°. 26, 1963, p. 266. 尚, 11月30日には, *La Nouveauté* もこのパンフレットを喧伝している。

17) Stendhal, *Correspondance* II, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1967, p. 814.

18) *Nouveau complot*, p. 277.

19) *Correspondance* II, p. 815.

vous relevez, si le reste vous paraît inintelligible ou vide de sens, je vous plains. Je n'essaierai cependant pas de vous en donner l'intelligence, il vaut mieux vous laisser disserter sur les mérites comparés de Racine et Shakespeare, du vers blanc et de l'alexandrin.<sup>20)</sup>

セルクレが『陰謀』の論者を、サン・シモンの理念を十分に理解しているとは言いがたく、従って『生産者』の論敵ではないとみなしているのは明らかである。セルクレの目には、このパンフレットの論旨は真面目に取りあげて理論的議論の対象とするにはあまりにも的の外れたものであったに違いない。実際、手紙の筆者は、「あなたの仕事が『生産者』紙の中に議論をもち込む性質のものではなかったことを残念に思います。もしもそうであったならこんな手紙をお送りすることもなかったでしょうが。」<sup>21)</sup>とこの書簡を結んでいる。

これをうけてスタンダールはその日のうちに返事を書いている。いくつかの反論を試みてはいるが、自らの経済学の分野の教養の不足を認める調子を帯びているのも事実である。

Je ne puis qu'accéder entièrement à tout ce que vous dites et de votre incontestable supériorité en économie politique et de mon métalent en cette matière. Ces deux vérités sont également évidentes pour moi.<sup>22)</sup>

そして議論をイデオロギー的もしくは経済学的なものから文学の領野へ移動させようという意図さえ窺える。しかし、サン・シモン主義とそれを奉ずる産業家を攻撃することにこの政治的パンフレットの当初の動機があったことを考えれば、文学上の議論に甘んじることは出来ないはずであり、「あなたは私の *plaisanteries* を、私はあなたの *obscurités*

20) *Ibid.*, p. 815.

21) *Ibid.*, p. 816.

22) *Ibid.*, p. 72.



prétentieuses を互いに高くは買わない」<sup>23)</sup>といった問題で済まされないはずである。にもかかわらず、自分の仕事に対して、しかもイデオロジックなレベルでの攻撃を意図した仕事に対して、《plaisanteries》と形容しなければならなくなったところにパンフレット作家スタンダールの不幸があると考えなければならない。そして手紙の結びでは、第二版が出る事があれば訂正する意図さえ見せている。<sup>24)</sup>

Si vous me permettez de rire de ce qui me semble affecté, et que, par extraordinaire, ma brochure ait une seconde édition, j'effacerai, sans que vous m'ayez rien dit à ce sujet, ce qui a pu paraître inculper vos intentions; car les gens qui pensent ne doivent pas donner à rire à ceux qui digèrent.<sup>25)</sup>

次いで12月3日には『パンドーラ』*La Pandore*<sup>26)</sup>、『商業新聞』*Journal du Commerce*<sup>27)</sup>、そして『生産者』の三紙が『陰謀』に関するコメントを掲載する。

まず『パンドーラ』の批判は、スタンダールがギリシャで没したパイロンとナヴァリノで戦死したサンタ・ローザを讃えたあと、「この間に産業家たちは何をしたというのか」<sup>28)</sup>と批判した部分を踏まえて次のように展開されている。

23) *Ibid.*, p. 73

24) 実際12月17日号の『グローブ』*Le Globe* 紙に、『陰謀』のかなりの部分が削除された形で掲載されている。しかしこの記事がスタンダール自身によるものか否かは研究者のあいだで意見が分れているので、ここでは深く立ち入らない。

25) *Correspondance* II, p. 73.

26) 『鏡』*Miroir* (1821—1823) の後を継ぐ形で1823年から1828年にかけて発行された自由主義的新聞。

27) *Le Constitutionnel* と並んで自由主義陣営の最も重要な機関誌。この時代その実権はラフィットの手中にあった。

28) *Nouveau complot*, p. 283.

Qui n'admire le trépas héroïque de ces deux grands hommes? Mais n'est-ce pas aussi rendre service à la société que de transporter dans un pays les produits d'un autre, d'y naturaliser de nouvelles branches d'industrie, qui y feront circuler la richesse? N'y a-t-il donc pas quelque maladresse dans cette comparaison épigrammatique, lorsqu'on vient de dire: «La classe pensante accorde sa considération à tout ce qui est *utile* au plus grand nombre»? <sup>29)</sup>

さらにここでスタンダールは《un agreable parleur》と呼ばれ、『陰謀』自体は《boutades》として処理されるのである。

Mais peut-être avons-nous tort de prendre au sérieux des boutades qui n'ont d'autre cause que cette démangeaison qu'un agreable parleur éprouve parfois de dire son mot. <sup>30)</sup>

『商業新聞』の反論もほぼこれと同じ論調であるといってよい。一例を引用しておくにとどめる。

Mais après s'être amusé des quolibets de M. de Stendhal, c'est le nom que prend l'auteur, ils [= les industriels] pourront bien aussi rire un peu de l'excessive légèreté avec laquelle il s'est aventuré dans une discussion qui exigeait des études spéciales dont il ne paraît pas s'être occupé, quoiqu'il déclare, avec une fierté assez récréative, qu'il a lu Mac Culloch, Malthus, et Ricardo. A la bonne heure! Ces écrivains ne lui auront sûrement pas conseillé de remplacer des arguments par des personnalités, et de substituer des insinuations à la logique. Il est même probable que beaucoup de gens, dans le comptoir et hors du comptoir, jugeront sévèrement et qualifieront d'une manière peu flatteuse un tel abus de l'esprit. <sup>31)</sup>

29) *La Pandore*, samedi 3 decembre 1825, p. 3

30) *Ibid.*, p. 3.

31) *Journal du Commerce*, samedi 3 decembre 1825.

最後に『生産者』紙上の記事を瞥見するが、このアルマン・カレルの駁論<sup>32)</sup>はいくつかの点でかなり重要である。まず、先にも解れたように、『陰謀』には英雄の自己犠牲的行為との比較によってこの時代の産業家達の行為を断罪する論理展開が随所に見られるが、これに対するA・カレルの反論は明解である。

A cela nous répondrons que, tenant compte au passé de ce qu'il offre de grand, nous n'avons cité pour établir nos doctrines, ni l'exemple des hommes, ni celui des choses qui lui appartient; que le temps des désintéressements héroïques a été aussi celui des prostitutions infâmes; et que nous demandons à l'avenir un état de choses dans lequel personne n'ait à faire abnégation de soi-même, et où tous les intérêts bien entendus soient solidaires, et garants l'un de l'autre.<sup>33)</sup>

論者はさらに続けて、スタンダールの宣揚する自己犠牲的行為は《vertus transcendantes》であり、来たるべき未来にはそのような《vertus》は恐らく少なくなるだろうと言う。そして「知識と物質的幸福の増進によってあまりに永きにわたって個人的な徳 *vertus privées* しか存在しなかった所に公の徳 *vertus publiques* が生まれることだろう。」<sup>34)</sup>と予測している。

カレルによるこの《*vertus privées*》と《*vertus publiques*》の区別は、スタンダールの《*utilité*》の考えの中には見出せないもの、従って彼自身恐らくは明確に意識し得なかった区別であって、前述したイデオロギー的レベルから個人の「好み」のレベルへの論理の横すべりという弱点を見事に突くものである。ヒロイズムという「超越的な徳」を「考える階級」の名において賞揚するあまり《*vertus publiques*》という側面に思いの至らなかつたのをカレルは巧みに捉えていると言ってよい。ここにスタ

32) この記事は署名がなされていないが、目次に《M. Carrel》とある。

33) *Le Producteur*, samedi 3 décembre 1825, p. 440.

34) *Ibid.*, p. 441.

ンダールの絶対的な理想主義をみてとって多分間違っていないだろう。『ラシーヌとシェイクスピア』がよく示しているように、観念学的教養は彼の内に相対主義的世界観を鍛えあげたが、ヒロイズムの絶対性にこの相対主義をもち込む覚悟は彼にはなかったようである。

これまでみてきたように、『陰謀』をめぐる自由主義的論説は、そこにみられる皮肉やレトリックを差し引いても、このパンフレットの作者をこうした問題を論じる資格あるものとして正面から相手にしているとは言い難い。従って、作者が議論の埒外に置かれているという孤立感をもったとしても容易に察し得ることである。さらに、自ら自由主義の陣営に足場を置きながら、外に足を踏み出すことなくこの陣営のイデオロギーの根底を批判し、逆にこの陣営から爪弾きにされたのであってみれば、それはなおさらである。

この孤立感と焦躁感は12月9日付のミラ宛の手紙<sup>35)</sup>によくあらわれている<sup>36)</sup>。そしてここでも再び産業主義に対する攻撃がみられる。

L'*industrialisme* veut faire travailler tout le monde. Dès qu'il n'y aura plus de *dolce fer niente* on ne trouvera plus personne pour goûter l'*Orlando* de l'Arioste ou les statues de Canova [...] Si l'*industrialisme* nous envahit nous deviendrons encore plus barbares pour les arts. Nous serons tristes comme des Anglais. Ces pauvres gens succombent sous l'excès du travail.<sup>37)</sup>

ここで *dolce fer niente* (のらくら暮らすこと) という言葉が出て来ているのに注意したい。あの6000リーヴルの年金生活者からなる「考える階

35) この手紙は1963年になって初めて全体がV・デル・リットの手によって公にされ、それまで1821年のものとされていたのが1825年12月9日のものであることが確認された。Cf. V. Del Litto, article cité.

36) 例えば、《*La Pandore a blâmé sans comprendre un mot.*》*Correspondance* II, p.76.

37) *Correspondance* II, p. 76.

級」の理想をまたも繰り返しているのである。この攻撃のあとで手紙の筆者はヴァリエテ座の座長（ミラ）に、自分の考えをいくつかの小新聞が書くように仕向けられないか打診するが<sup>38)</sup>、このスタンダールの試みは無益に終わったようである。

この後、『グローブ』紙が序文をつけていくらかの部分削除した形で『陰謀』のテキストを掲載する<sup>39)</sup>のを最後に、このパンフレットは作者の内に孤立感を残してジャーナリズムから消えることになる。

では、少なくとも作者自身にとってはひとつの大きな事件であったに違いないこのパンフレットは一体何をもたらしたであろうか。確かに、政治的パンフレットの意図からすれば、攻撃の相手がこれを議論に足るものとして正面から取りあげようとしなかった時点ですでに失敗である。そしてこの失敗の故にスタンダールは他の自由主義者達との間の溝をことのほか深いものとして認識し直したであろうし、それがためにまた孤立感は一層大きなものとなったであろう。「考える階級」という言葉の上でからくも調停されていた彼自身の個人的なヒロイズムへの愛着とイデオロギー批判の形をとる政治パンフレットの社会性との関係は、その両立し得ない矛盾を孕んだまま崩れたのである。これを最後に彼が再びパンフレットに手を染めることはない。

### III

『ラシーヌとシェイクスピア』において「パンフレットは時代の喜劇である」と述べられてあったことを思いおこせば、確かに J.-M. グレーズの言うように、パンフレットは滑稽さを告発する喜劇と批評活動としての小説の中間項として位置づけられるかもしれない<sup>40)</sup>。「パンフレットの失

---

38) *Ibid.*, p. 76.

39) 註24)を参照。

40) 《Présentation》 de Jean-Marie Gleize, in *D'un nouveau complot contre les industriels*, Flammarion, 1972. p.63.

敗、イデオロギー上の失敗はエッセーと小説の成功となるであろう」<sup>41)</sup>と G. ムイヨも言うように、1826年1月にスタンダールは初めての小説『アルマンヌ』に着手するからである。

パンフレットの失敗と小説の誕生がある因果関係をもつのだとすれば、その因果関係とはいかなるものであり得ただろうか。次にこの点を検討してみよう。

『アルマンヌ』が *babilanisme* をその一つの主題として書かれたことはよく知られている。本稿が考察の対象としてきた1825年12月頃、デュラ夫人の同じテーマを扱った小説『オリヴィエ』*Olivier ou le secret* がパリのサロンで人々の話題になったのを契機に、やはりこのテーマを使ってあたかもデュラ夫人の作であるかのように出版されたH・ド・ラトゥーシュの小説を書評する過程でスタンダール自身のうちにこのテーマを扱った小説を書く考えが浮かんだというのも周知の事実である。このような経過から従来の研究者のあいだでは、この謎めいた小説に言及する場合、小説中では「秘密」としてしか言われていない主人公の生理的欠陥が真の主題であるのか、それともそれはひとつの主題に過ぎないのか、といった問題の周辺に議論が集中する傾向にあるが、いま一度、この作品には、『陰謀』で論じられる自由主義的ブルジョワの産業主義礼讃、「考える階級」が「高い尊敬」の情をもって報いんとする貴族主義的精神、これらのテーマが随所に見出し得ることを強調したい。

早くも26年1月3日のルヌアール宛の手紙でスタンダールはすでにこの小説に触れて、ここ二、三年の風俗を描くことに努めたとはっきり述べている（もっともこの段階ではまだ書き始めていなかったのだが）。

Dans deux mois, j'aurai à placer le manuscrit d'un roman, en trois volumes in-12, écrit à peu près du style de la *Vie de Rossini*.

J'ai cherché, dans ce roman, à peindre les mœurs actuelles,

---

41) G. Mouillaud, *op. cit.*, p. 81.

telles qu'elles sont, depuis deux ou trois ans.<sup>42)</sup>

そしてさらに重要と思われるのは次の記述である。

Mon premier soin a été de ne pas m'écarter du ton de décence de *Marguerite Aymon* [sic]. Enfin, l'on ne devinera pas si l'auteur est *ultra* ou *libéral*.<sup>43)</sup>

すなわちここで手紙の筆者は、ウルトラであるか自由主義者であるか、読者には見分けられないような立場に身を置いてこの小説を書こうとしていることがわかる。そしてこの点にこそ、パンフレット作家スタンダールから小説家スタンダールへの移行をみななければならない。政治パンフレット作家はいうまでもなくある一つの利害を代表する集団に身を置き、それを明言しなければならない。しかしスタンダールの場合、現実の問題としてそうした集団をもち得なかったがゆえにこそ、先に論じたように「考える階級」なる概念をもち出してきたのであった。さらにまさしくこのことによって、『陰謀』は、少なくとも効果においては失敗となり、彼は自由主義者のあいだで孤立感を感じざるを得ない羽目に陥ったのであった。この状況を念頭においた上で先の手紙を読めば明らかに、パンフレットとは異なる形で政治を扱う方途を小説の中に見出そうとしていることがわかるだろう。特定のイデオロギーの立場を明確にせぬままに政治・経済を縦横に論じ得る手段——*babilanisme* という好個のテーマがこの時期偶然目の前にころがっていたことが直接の動機であるにせよ——この手段の可能性こそがスタンダールを必然的に小説に向かわしめた要因と考えられるのである。

こうした文脈の中で小説の「序」を読んでみると、作者の立場を韜晦することにかかなりの力点がおかれていて興味深い。

...il [= l'auteur] a mis en scène des industriels et des privilégiés, dont il a fait la satire. [...]

Imputerez-vous à un tour méchant dans l'esprit de l'auteur

42) *Correspondance* II, p. 79.

43) *Ibid.*, p. 79.

les descriptions malveillantes et fausses que chaque parti fait des salons du parti opposé? Exigerez-vous que des personnages passionnés soient de sages philosophes, c'est-à-dire n'aient point de passions? [...]

En attendant, nous sollicitons un peu de l'indulgence que l'on a montrée aux auteurs de la comédie des *Trois Quartiers*. Ils ont présenté un miroir au public; est-ce leur faute si des gens laids ont passé devant ce miroir? De quel parti est un miroir?<sup>44)</sup>

さらに注目すべきは、作者の中立的立場（というよりもむしろ立場の韜晦）を弁護するために、ここであの有名な「鏡」の隠喩を用いていることである。この隠喩は確かにおのれの言述に対する責任逃れには恰好の比喩だが、これまで論じてきた文脈からすれば、むしろそこに作者の立場を隠すことの意味を読むべきだろう。鏡は対象を忠実に写すが鏡それ自体を写すことは決してない。パンフレット作家は自らの利害を自らの名において守るために自ら攻撃の矢を放たねばならず、従って鏡にはなり得ない。小説の作者はこれに対して、常に反射するのみで自ら光源となることはないのである。

『陰謀』の末尾で「考える階級」は、ギリシャを救うためにミノロイオンで没したバイロン卿の名をサンタ・ローザのそれと共に「不死となるべき名をとどめる大理石板に刻み込んだ。」<sup>45)</sup>『アルマンス』の結末部では、ギリシャに向かう船上でオクターヴが自殺を遂げる<sup>46)</sup>。両者に共通する「ギリシャ」の象徴論的意味は等しい。しかし前者は「考える階級」の名においてその意味づけを行っているのであり、後者は小説家としてそれを

44) *Armance, Œuvres complètes*, Cercle du Bibliophile, t. V, pp. 4-5.

45) *Nouveau complot*, p. 283.

46) *Armance*, pp. 302-303.



報告しているのである。

小説家としてのスタンダールの誕生を考える時、「考える階級」から「鏡」への移行は見落とすことのできない要因であると考えられる。『陰謀』は、小説家の政治的立場を明らかにするという意味のみならず、小説への必然的移行という視角からも極めて重要な位置にあると言わねばならない。

(本学非常勤講師)